

利益を生む方法は！

～授精適期を見逃さず、受胎頭数を常に維持し続けることにあり～

酪農は安定的な乳量持続に加え、妊娠頭数の安定的継続が重要です。しかし、自分の牧場でどれだけの頭数の発情を見逃しているかご存じでしょうか？今回は、儲けの2本柱である「乳量」「繁殖」のうち、繁殖についておさらいしたいと思います。

1. 牛群検定における「繁殖」

繁殖管理を考えた時、牛群検定成績表で皆さんが真っ先に目にする箇所は、分娩間隔と授精報告ではないでしょうか？

生産者の方からよく耳にするのが、「昔に比べ乳牛の発情兆候そのものが分かりにくくなっている。分娩後の初回発情への授精だと着床する事はあるが、その後にくる発情は授精しても着床しない。そして、随分後にくる(5～6回目)発情でつけてやっと着床するかな？」といったところです。

牧場の授精報告(初回授精)の日数分布が、検定成績表の1枚目の右下に集計表示(図1参照)されていますので、ご自身の牧場の初回授精の傾向(割合)について確認してみてください。

(図1)

計	除籍率	授精報告	未經産	5頭	33%	乳 3頭	
1	5	経産	49頭	73%	乾		
7	5	頭数	分娩後日数			検定種別	
		59日以下	60～79日	80～99日	100～119日		120日以上
1	1	今月の未授精牛	17頭	11頭	1頭	3頭	2頭
15	17	前月	9	1	1	2	5
-7)		(%)		11	1	22	56
80)		3ヵ月	17	1	2	3	8
		(%)		6	12	18	47
		過去1ヵ年	45	2	7	10	17
		(%)		4	16	22	38
除籍牛平均		繁殖に供さない牛					1頭
歳月	6-7						
産次	4.5						

2. 卵の成熟と受胎率

受胎の話に戻ります。受胎は発情を

見逃さない事も去る事ながら、牛のコンディション・栄養状態(エネルギーバランス)にも大きく左右されるところでもあります。一般的に卵の発育は、原始卵胞から一次卵胞・二次卵胞を経て成熟卵へ形成されていく中で、良質な優勢卵胞へと成熟するために、発情・排卵日から遡ること約80日前の栄養充足度の影響を大きく受けるとされています。(図2参照)

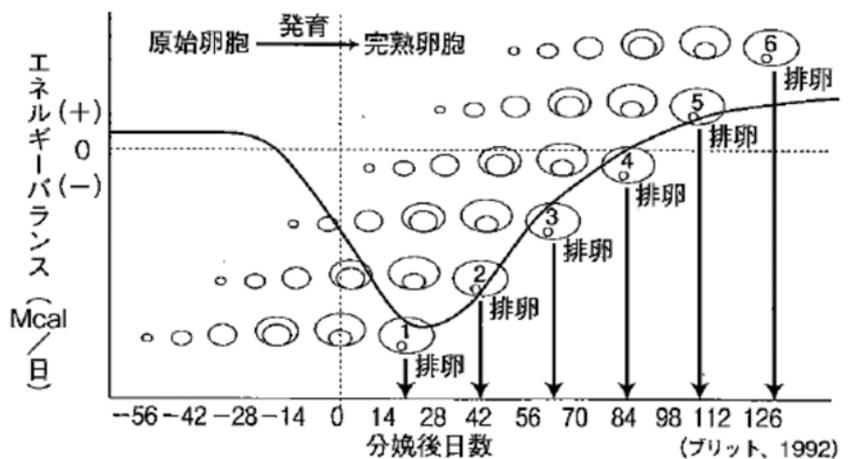
また、分娩後9日間のエネルギー不足は、2～3回目の発情周期の黄体期のプロゲステロンの分泌を低下させるとも言われており、飼養管理の中で最も頭を悩ませる期間でもあります。

もし、図1のようにあなたの牧場の初回授精が分娩後100日以降の割合の方が多い(50%を超える)ようであれば、原因のひとつとしてこのような要因が考えられるかもしれません。また、これからの時期、徐々に涼しくなってきますが、暑熱ストレスにさらされた牛は気温が低下しても2ヶ月間は受胎しないとも言われている事から、「繁殖」成績が思わしくない方は、翌年の暑熱対策(カウコンフォート)についても改めて見直してみる必要があるかもしれませんね。

*次回号は、繁殖を改善するための「飼養管理」を中心にお話したいと思います。

(図2)

分娩後に排卵される卵胞の発育と栄養バランスの関係



詳細は岡山種雄牛センター(電話 0868-57-2475)岡橋までお問い合わせください。